杜詩「瘞夭」考
―謝宇衡論文の検討を中心として―

後藤秋正

はじめに

『杜詩詳注』（以下、『詳注』）巻二十三に、仇兆鰲が杜甫の絶筆として載せる「風疾、舟中伏枕書懐、三十六韻、奉呈湖南親友（風疾に、舟中枕に伏し懐いを書す、三十六韻、湖南の親友に呈し奉る）」がある。[1]『詳注』は詩中に「歳陰」「冬炎」[2]の語があることから、この詩を大暦五年（七七〇）冬の作とする。この詩の、『詳注』が八段落に分けるその第五段落の十句は次のように詠じられる。

43春草封帰恨　春草　帰恨を封し
44源花費独尋　源花　独り尋ぬるを費やす
45転蓬憂悄悄　転蓬　憂い悄悄たり
46行薬病涔涔　行薬　病涔涔たり
47瘞夭追潘岳　夭を瘞むるは潘岳を追い
48持危覓鄧林　危を持するは鄧林を覓む
49蹉跎翻学歩　蹉跎　翻って歩を学び
50感激在知音　感激　知音に在り
51却仮蘇張舌　却って仮る蘇張の舌
52高誇周宋鐔　高く誇る周宋の鐔

『詳注』がこの段落について「此衰年留滞之感。」（此れ衰年留滞の感。）と述べるように、前の段落で蜀と楚の地を放浪したことを述べたのに続いて、近頃の情況を記した部分である。「春草」以下の四句は舟中で病臥し、いや増す望郷の念を抱きつつ、薬物の助けを借りながら依然として放浪を続けていることを述べている。

では第四十七句はどうであろうか。夭逝した者を埋葬して潘岳の故事を追思するという表現が、潘岳「征西賦」（『文選』巻一〇）と「傷弱子序」（同上、李善注引）を踏まえていることは、『草堂詩箋』、『詳注』、『読杜心解』（以下、『心解』）などの諸注に指摘されている。「征西賦」には、

「夭赤子於新安、坎路側而瘞之。亭有千秋之号、子無七旬之期。」（赤子を新安に夭し、路側に坎（あなほ）りて之を瘞む。亭に千秋の号（な）有るも、子に七旬の期無し。）とある。また、「傷弱子序」には、「三月壬寅、弱子生。……甲辰而弱子夭、乙巳瘞于亭東。」（三月壬寅、弱子生まる。……甲辰にして弱子夭し、乙巳　亭の東に瘞む。）と言う。

しかし、杜詩において「夭」を埋葬したとは、誰を埋葬したのかという点については実にさまざまな見解が提出されている。以下、この点について再検討してみたい。

一

「瘞夭」の語を詳細に考察した研究に、謝宇衡「読杜識小（三則）」（「杜甫研究学刊」一九九四年一期。以下、謝論文）がある。この論文は、これまで諸説が提出されながら十分には検討されなかったこの語を再検討し、「夭」が誰を指すのかについて新たな見解を提示した点で注目される。そこで謝論文を吟味することから始めたい。

謝論文は旧注の検討から始める。まず、『詳注』が「瘞夭、痛児女之亡。」（瘞夭は、児女の亡きを痛む。）と言い、『心解』巻五が、「瘞夭、時当有悼殤事。」（瘞夭は、時に当に悼殤の事有るべし。）と言い、『杜詩鏡銓』（以下、『鏡銓』）巻二十が「時必有悼殤事。」（時に必ず悼殤の事有り。）と言って、当時、杜甫が「児女」の死を悼んだことは既に指摘されてはいるが、多くの注釈が誰を埋葬したかにはほとんど言及しないことを指摘する。その上で黄鶴注が埋葬されたのは宗文であるとしているのは誤りであると見なす。謝論文は引かないが、黄鶴『補注杜詩』「年譜弁疑」大暦四年の条には次のように言う。

……又云「瘞夭追潘岳、持危覓鄧林」。当在是年冬晩作、不然即次年春作。是年先生必有哭子之戚、故用瘞夭事。……意所謂瘞夭即宗文也。

……又云う「夭を瘞むるは潘岳を追い、危を持するは鄧林を覓む」と。当に是の年の冬晩に在りての作なるべし、然らずんば即ち次年春の作ならん。是の年先生必ず子を哭するの戚（うれ）い有り、故に瘞夭の事を用う。……意（おも）うに所謂夭を瘞むるは即ち宗文なり。

また、これも謝論文は引かないが、黄鶴『補注杜詩』巻三十六、「風疾舟中」詩の「瘞夭」の注では以下のように言う。

趙云、公必有喪子之禍而不明其為喪宗文。師能引序語而乃以為悼厳武之亡。按武死于永泰元年四月。去大暦四年作詩時已五年。又不応用瘞夭事。……意是四年

自潭之衡時喪宗文、以与聶令有旧、故瘞于耒陽、而公死不果徙也。

趙云う、公　必ず子を喪うの禍有りて而も其の宗文を喪うと為すを明らかにせずと。師は能く序語を引きて乃ち以て厳武の亡きを悼むと為す。按ずるに武は永泰元年四月に死す。大暦四年　詩を作る時を去ること已に五年。又応に瘞夭の事を用うべからず。……意(おも)うに是の四年　潭より衡に之く時　宗文を喪い、聶令と旧有るを以て、故に耒陽に瘞め、公死して徙すを果たさざるなり。

謝論文は誰を埋葬したかに言及したのは黄鶴が最初であると述べるが、それは誤認であり、趙次公は宗文を喪ったことを明言しないもの[3]の『補注杜詩』の指摘に見えるように、師尹が厳武の死を指すという見解を提出しており、黄鶴はこれを踏まえた上で、師尹の説を否定して宗文を耒陽に殯葬したことを指していると見なしたのである。

もちろん「瘞夭」の語は、潘岳の「傷弱子序」が、洛陽から長安に復帰する途次、生まれて七旬に満たずして亡くなった嫡子を悼んだこと[4]を踏まえている以上、厳武（七二六～七六五）のように夭逝したとは言えない成人の死を悼んだとするのは妥当ではない。黄鶴は厳武の死後、五年が経過していることを師尹説否定の根拠としているが、死後の経過年数の問題ではない。このことについては後に再び述べよう。謝論文は言及しないが『草堂詩箋』と『分門集注杜工部詩』も厳武の死を悼んだと見なしている。ここは『草堂詩箋』を引いておこう。

「瘞夭追潘岳」、悼(ママ)厳武之亡也。潘岳「傷弱子序」曰、……。又「征西賦」、……。「持危覓鄧林」、言武之死朝廷失大材也。

「夭を瘞むるは潘岳を追う」は、厳武の亡きを悼むなり。潘岳の「弱子を傷む序」に曰く、……と。又「征西の賦」に、……と。「危を持するは鄧林を覓む」は、武の死して朝廷　大材を失うを言うなり。

（『草堂詩箋』補遺巻一〇）

これは、杜詩の「持危」の語が『論語』季氏篇の「危而不持。」（危うくして持せず。）を踏まえると考えたために、前の句も厳武を言うと解釈したのであろう。しかし杜詩の「持危」は、危機に瀕した国家を支えるという意味ではあるまい。この語は『全唐詩』にあと一例しか見えず、費冠卿の五律「挂樹藤」（『全唐詩』巻四九五）に、

向日助成陰　日に向かいて助けて陰を成し
当風藉持危　風に当たりて藉(か)りて危を持す

と詠じられる。この詩でも吹く風に対し、樹木に支えられて立つという意味で用いられているからである。また「鄧林」の語も、『山海経』海外北経に見える、夸父の棄てた杖が鄧林と化した故事に基づいて身体を支える杖を探すことをいうのであって、厳武と結びつくわけではない。

さらに謝論文は『銭注杜詩』（以下、『銭注』）が宗文を指すとする説に反論を加えていることにも言及している。『銭注』巻十八が反論の対象とするのは黄鶴の説である。

瘞夭、征西賦、……。黄鶴因瘞夭一語、疑為宗文之故。年譜遂大書曰、是年四月宗文卒、則妄矣。潤州刺史樊晃叙杜工部小集云、君有宗文宗武、近知所在、漂寓江陵。則宗文之亡、実在工部没後也。

瘞夭は、潘岳の征西の賦に、……と。黄鶴は瘞夭の一語に因りて、疑いて宗文の故と為す。年譜に遂に大書して曰う、是の年四月宗文卒すと、則ち妄なり。潤州刺史樊晃は杜工部小集に叙して云う、君に宗文宗武有り、近ごろ所在を知るに、江陵に漂寓すと。則ち宗文の亡きは、実に工部の没後に在るなり。

ここに「年譜」とあるのは先に引いた『補注杜詩』「年譜弁疑」のことである。『銭注』が引く樊晃「杜工部小集序」（『銭注』附録）には、「工部員外郎杜甫、字子美。……君有子宗文宗武、近知所在、漂寓江陵。」（工部員外郎杜甫、字は子美。……君に子宗文宗武有り、近ごろ所在を知るに、江陵に漂寓す。）という記述がある。宗文らの生存が事実であれば、杜甫が宗文の死を念頭に置いて「夭を瘞む」と言うことはあり得ない。宗文の生年ははっきりしない。ただ陳冠明・孫愫婷『杜甫親眷交遊行年考』（上海古籍出版社、二〇〇六）が推定するように、天宝九載（七五〇）前後に生まれているとすれば、大暦四・五年には二十歳前後にはなっており、仮に宗文を指すと認めたにしても、これを「夭」と称するには無理がある。『銭注』「注杜略例」が次のように述べるのは、これも黄鶴の発言を否定したものである。

元微之墓誌載嗣子宗武、譜以宗文為早世也。遂大書于大暦四年曰、夏復回潭州、宗文夭。按樊晃小集敍、子美没後、宗文尚漂寓江陵也。若此之類、則愚而近于妄矣。

元微之の墓誌に嗣子宗武を載せ、譜は宗文を以て早世すと為すなり。遂に大暦四年に大書して曰う、夏復た潭州に回り、宗文夭すと。按ずるに樊晃の小集敍に、子美の没後、宗文は尚お江陵に漂寓するなりと。此の若きの類は、則ち愚にして妄に近し。

『詳注』は「風疾舟中」詩の条（巻二三）においても黄鶴の説に反論を加える。『詳注』はまず「瘞夭、痛児女之亡。」（瘞夭は、児女の亡きを痛む。）と述べて「児女」が亡くなったことを指すという点は認めながら、語注において、「黄鶴以瘞夭為葬宗文。」（黄鶴は夭を瘞むるを以て宗文を葬ると為す。）と言い、詩の末尾に、「今按、宗文若卒於湖南、応有哭子詩、集中未嘗見、亦黄氏意擬之詞耳。」（今按ずるに、宗文若し湖南に卒すれば、応に子を哭する詩有るべし、集中未だ嘗て見ず、亦黄氏　意もて擬するの詞なるのみ。）と述べて、杜甫の集中には、宗文の死を哭した「哭子詩」が見えないことから、黄鶴の見解は臆測に過ぎないと見なすのである。

謝論文が指摘するとおり、黄鶴の説に反駁しながら、別の見解を提示したのは施鴻保『読杜詩説』巻二十三である。『読杜詩説』は「入衡州」の注で以下の議論を展開する。長くなるが叙述の都合上、次に引いておこう。

「入衡州」云、「遠帰児侍側、猶乳女在旁」。今按此是自敍。公先有二女、「北征」詩云、「床前両嬌女」、可證。計其年当已皆嫁、前説呉郎司法・王郎司直、疑即両女之壻。此云「猶乳女」、則公晩年又生一女也、後「風疾舟中」詩、「瘞夭追潘岳」、或即此女早殤、潘岳詩、亦殤女也。黄鶴以元稹墓志、但言宗武、謂宗文早夭、瘞夭即宗文。此注謂宗文若夭、公当有哭子詩、集中未見、即非也。此説亦未明晰。宗文年雖無考、惟拠「大暦二年熟食日示二子」詩、及前「催宗文督修鶏柵」等詩、其年当已不小、若即前詩所云、不応称夭矣。此女是六十左右所生、又当奔走道路之時、或致不育、瘞夭疑即是也。

「衡州に入る」に云う、「遠く帰れば児は側に侍す、猶お乳して女は旁に在り」と。今按ずるに此れは是れ自ら敍ぶ。公先に二女有り、「北征」の詩に云う、「床前　両嬌女」と、證す可し。其の年を計るに当に已に皆な嫁すべし、前に呉郎司法・王郎司直を説いて、即ち両女の壻ならんかと疑う。[5] 此に「猶お女に乳す」と云うは、則ち公　晩年に又一女を生むなり、後の「風疾舟中」詩の、「夭を瘞めて潘岳を追う」は、或いは即ち此の女は早殤せしならん、潘岳の詩も、亦殤女なり。黄鶴　元稹の墓志に、但だ宗武を言うを以て、宗文は早に夭す、夭を瘞むるは即ち宗文と謂う。此の注に宗文若し夭すれば、公　当に子を哭する詩有るべし、集中に未だ見ざるは、即ち非なりと謂う。此の説も亦未だ明晰ならず。宗文の年は考うる無しと雖も、惟だ

「大暦二年熟食日二子に示す」詩、及び前の「宗文を催して鶏柵を督修せしむ」等の詩に拠るに、其の年は当に已に小ならざるべし、即ち前の詩の云う所の若きは、夭と称するに応ぜず。此の女は是れ六十左右の生む所にして、又　道路に奔走するの時に当たり、或いは育たざるを致す、瘞夭は疑うらくは即ち是れなり。

ここで「潘岳の詩」と言っているのは「稚子」の死を悼んだ「思子詩」（『芸文類聚』巻三四）を指すのであろう。ただし「思子詩」は、「傷弱子序」で述べられた男児の死を悼んだものであって「殤女」を対象としたものではない。あるいは「金鹿哀辞」（『芸文類聚』巻三四）を指しているのであろうか。施鴻保は杜甫が晩年、六十歳前後に儲けた、「早殤」した女児を埋葬したと考えたのである。[6] しかし謝論文が指摘するように、「入衡州」に見える乳飲み子の「女児」が「瘞夭」の対象となった子を指すと明確に判断できる材料はない。

また『読杜詩説』は先の議論に続けて自説を補強し、次のようにも言う。謝論文はこの部分には言及しない。

又按前「暮秋枉裴道州手札」云、「使我昼立煩児孫。」則公此時已有孫、且年必不少、故可扶立。惟不知即宗武子嗣業否耳、或是宗文之子。元稹墓志、既不及宗文、宜並不及其子也。

又按ずるに前の「暮秋裴道州が手札を枉ぐ」に云う、「我をして昼に立つに児孫を煩わさしむ。」と、則ち公此の時已に孫有り、且つ年必ず少からず、故に立つを扶く可し。惟だ即ち宗武の子の嗣業なるか否かを知らざるのみ、或いは是れ宗文の子か。元稹の墓志は、既に宗文に及ばず、宜しく並びに其の子に及ばざるべきなり。

「暮秋、枉裴道州手札、率爾遣興寄、遞呈蘇渙侍御」（『詳注』巻二三）には、次のように、昼間は子供や孫に助けられて立つことが詠じられる。

使我昼立煩児孫　我をして昼立つに児孫を煩わさしめ
令我夜坐費燈燭　我をして夜坐するに燈燭を費さしむ

施鴻保はこの詩の「児孫」を宗文か宗武の子であろうと推測したのである。しかし、「入衡州」に言う「女」は乳飲み子であって、杜甫の起居を扶けることは不可能である。

さて謝論文は以上に見たような検討を経て、当時、杜甫の身辺に「入衡州」の「猶乳女在旁」の句に言う「女」がいたことは確かだが、「風疾舟中」詩の「瘞夭」はこれとは関わりがないと言い、「自京赴奉先県詠懐五百字」（『詳注』巻四）の以下の句を引き、新たな見解を提示する。

85入門聞号咷　門に入れば号咷を聞く
86幼子餓已卒　幼子　餓えて已に卒すと
87吾寧捨一哀　吾寧(なん)ぞ一哀を捨てんや
88里巷亦嗚咽　里巷も亦嗚咽す
89所愧為人父　愧ずる所は人の父と為りて
90無食致夭折　食無くして夭折を致せしこと

天宝十四載（七五五）十一月、杜甫は長安から家族を預けてあった奉先県（陝西省蒲城県）へ赴いた。すると「幼子」が餓死していたのである。幼子の年齢と性別は不明だが、至徳二載（七五七）閏八月、鄜州（陝西省富県）の羌村で書かれた「北征」（『詳注』巻五）では、「牀前両小女、補綻才過膝」（牀前の両小女、補綻して才(わず)かに膝を過ぐ）とあるから、二人の少女よりも年下の女児であったかもしれない。謝論文は「自京赴奉先県詠懐五百字」を引用して、「用潘岳事、表明此際亦念及此一悲惨事件。」「故鄙見認為『瘞夭』一語乃指奉先幼子之夭折、与『猶乳女』無渉。」と述べ、「瘞夭」は奉先県で幼子を夭折させたことを指すと結論づけるのである。

二

まず謝論文の所説を中心に検討を加えたが、謝論文は先に発表された呉鷺山「杜詩弁釈七例」四（『杜詩論叢』浙江文芸出版社、一九八三。以下、呉論文）には言及しない。呉論文も「瘞夭」の二句を取り上げている。呉論文は聞一多『少陵先生年譜会箋』（『聞一多全集』開明書店、一九四八。大安、一九六七影印）が大暦五年の条で、黄鶴注が「夭」は宗文を指すとした見解を否定して、「潘岳『征西賦』中之『夭』是赤子、宗文是時計年当已及冠、不得謂為赤子。」（引用は原文の通り）と指摘したことを肯定する。宗文は成人に達していたので潘岳のいう「赤子」には相当しないというのである。ただし聞一多が、「夭」は「入衡州」詩の「猶乳女在旁」の句に見える女児を指すとした見解[7]には同意せず、結論としては以下のように言っている。

> 按杜甫旅泊湖南時期、家累很重、子女幼小的恐怕還不止那個哺乳的女孩。「暮秋枉裴道州手札」有「使我昼立煩児孫」之句、看来詩人此時已経有了孫子。「瘞夭」之「夭」、很難確定是哪一個孩子。説者以不必実指為妥。

夭逝した子はどの子と特定することは困難だが、「暮秋、枉裴道州手札、率爾遣興寄、遞呈蘇渙侍御」にも「児孫」の語が見えているように、「孫子」を指すとするのが妥当であろうというのである。

三

「夭」は奉先県で亡くなった幼児を指すとする謝論文の見解に疑問を呈したのが、李殿元・李紹先「絶筆詩中的『瘞夭』之謎」（『杜甫懸案揭秘』四川大学出版社、一九九六。以下、李論文）である。李論文は謝論文を検討して、謝論文が「入衡州」の「女」と「風疾舟中」の「瘞夭」とは無関係であると見なしたことに対して、これは推測であって根拠が不明確であるとし、さらに「自京赴奉先県詠懐五百字」に見える餓死した「幼子」を指すとする結論について、以下のように述べる。

杜甫会不会在身臨絶境・生命将尽之時想起十五年前那悲惨的一幕呢？十五年来、杜甫乱離憂患・漂泊四方、悲傷苦痛之身不知経歴了多少、杜甫何以単単想起了幼子之死事？我們感到、這些問題并不是那么好回答的。所以、杜甫絶筆詩中的「瘞夭」、仍是一謎。

臨終に近い杜甫が十五年前の悲惨な出来事を想起できたか、十五年間にわたって多くの痛切な経験をしてきた彼が、ただ奉先での幼子の死だけを想起したであろうかと疑問を呈し、この問題には適切な「回答」はなく、謎のままだと述べるのである。確かに杜甫が十五年前の奉先県での出来事に限定して「瘞夭」と詠じたとすることには再考の余地があるだろう。しかし、「瘞夭」の語は繰り返すまでもなく幼子を埋葬することであって、幼子の死を述べたことには疑問の余地はない。李論文は黄鶴の説、『詳注』の説、『読杜詩説』の説などを紹介するものの、「瘞夭」の語の解釈を示すには至っていない。

四

「瘞夭」が誰を埋葬したかについての諸説は、結局のところ以下のように整理できよう。

①杜甫の長子、宗文。黄鶴『補注杜詩』。

②厳武。『草堂詩箋』補遺、『分門集注杜工部詩』。

③「入衡州」詩の「猶乳女在旁」の句に見える「女」、杜甫が六十歳前後に儲けた、「早殤」した杜甫の女児。『読杜詩説』。鈴木虎雄『杜少陵詩集』（国民文庫刊行会、一九三一）。聞一多『少陵先生年譜会箋』、『杜甫年譜』（四川人民出版社、一九五八）、信応挙『杜詩新補注』（中州古籍出版社、二〇〇二）。

④「児孫」、杜甫の孫。呉論文。

⑤「児女」、「小女」、あるいは「悼殤の事」とのみ述べて対象を特定しない。『詳注』、『心解』、『鏡銓』。韓成

武・張志民『杜甫詩全訳』（河北人民出版社、一九九七）。

⑥奉先県で餓死した「幼子」。謝論文。

⑦「謎」であって回答はない。李論文。

①と②について言えば、杜甫は「夭」を、「瘞夭追潘岳」と「無食致夭折」の句においてのみ用いている。これは潘岳「傷弱子序」からも見てとれるように、幼くして死ぬことを指して用いていることは明白である。[8] 従って成人に達して没した宗文と四十歳で亡くなった厳武（七二六～七五五）を指すことはあり得ない。[9] では③はどうであろうか。『読杜詩説』の説についてはすでに述べた。鈴木虎雄『杜少陵詩集』は「瘞夭」の「字解」で以下のように言う。

わか死にせしものをうづめる、作者の子の幼死せしものをいふ、想像するに「入衡州」詩の猶乳女在傍とある乳児などの没せしならん。黄鶴が注に長男宗文を葬るとなせるは夭の字にあはず。

「作者の子」と言う以上、鈴木説も杜甫が晩年に子を儲けたと考えていたと思われる。近年の『杜詩新補注』は黄鶴の説を誤りと見なし、次のように述べる。

杜甫晩年猶生一女、其在『入衡州』詩中云、「遠帰児侍側、猶乳女在旁」。此女猶乳、当不過一二歳。瘞夭応指此女。

「入衡州」詩の「女」は杜甫が晩年に儲けた子であって、「夭」はこの一・二歳の子を指すと考えるのである。『杜甫親眷交遊行年考』「杜甫家人行年考」の「山妻」の条では、この子の母親は杜甫が夔州で娶った後妻を指すと言い、「奉酬薛十二判官見贈」（『詳注』巻一九）と「孟倉曹歩趾、領新酒醬二物、満器見遺老夫」（『詳注』巻二〇）を用例として引く。大暦二年（七六七）の秋の作とされる後者には、「理生那免俗、方法報山妻」（理生那（なん）ぞ俗を免れん、方法山妻に報ぜよ）の句がある。『杜甫親眷交遊行年考』はこの「山妻」を薛判官の仲立ちによって娶った夔州の婦人と解したのである。[10] 年齢から考えて妻の楊氏が生んだ子とは見なせないので、「山妻」の子であるとすれば、「夭」の語とは符合する。④については先に述べた。杜甫は晩年に孫がいたらしいことは『読杜詩説』にも指摘があった。⑤について補足しておこう。『杜甫詩全訳』は「杜甫当有小女在湖南病死、故用潘岳事。」と言っている。これは『心解』、『鏡銓』の指摘を承けたものである。

では⑥はどうであろうか。再度述べるならば、謝論文は奉先県で餓死した「幼子」を指すとする主要な論拠の一つを「入衡州」と「風疾舟中」詩の特色の相違に見出してい

る。謝論文は、前者が最近の出来事を述べることに重点を置くのに対して、後者の述べるほとんどの事柄は当時起こったことではなく、『心解』が「純是老人病憊時、追思歴歴、寄謝種種情状。（純ら是れ老人　病み憊れし時、追思すること歴歴として、寄せて種種の情状を謝す。）」と述べているように、「一種惝恍恍迷離的精神状態（ぼんやりして、はっきりと区別がつかない精神状態）」にあって、過去を追懐したものであると言う。しかし、これは依拠する『心解』が「春草」以下の句について、「此六句、皆指近態。（此の六句は、皆な近態を指す。）」と言っていることとも齟齬をきたそう。『心解』は「瘞夭」の句が「近態」、つまり近頃の情況を述べたものであると認めているのであり、この句も含めて、朦朧とした精神状態の中で過去のことを述べたと見なしているわけではないのである。この点で『杜甫懸案掲秘』の謝論文に対する批判は正しい。さらに言えば、謝論文は「持危」の語を、足取りのおぼつかない体を支えるとする通説[11]とは異なって、「『持危』即扶危。危、指国事危殆。」と解釈する。こうした解釈をとったのは、過去の出来事を追憶するという解釈と整合させようと意図したからではなかろうか。そもそも、朦朧とした精神状態にあったならば七十二句からなる長篇「風疾舟中」詩を残せるものであろうか。

おわりに

「瘞夭」の語は、幼児を失うという偶発的な条件の下で用いられる語であり、詩における用例は極めて稀である。杜甫以前に用例はなく、その後も、南宋末期から元にかけての人である劉詵[12]（一二六八～一三五〇）と柳貫[13]（一二七〇～一三四二）の詩に見られるのみである。劉詵の五律「瘞夭」（『桂隠詩集』巻三）は次のように詠じられる。

鬚髪忽如此　鬚髪　忽ち此の如し
今朝復瘞孫　今朝　復た孫を瘞む
相看知極苦　相い看て苦しみを極むるを知る
少待亦能言　少く待ちて亦言う能わず
已已成泡滅　已み已みて泡と成りて滅し
睊睊但目存　睊睊として但だ目に存するのみ
老天均賦受　老天　均しく賦受す
夭寿与誰論　夭寿　誰と与に論ぜん

第二句にあるように劉詵は孫を失ったのである。劉詵には杜甫「遊竜門奉先寺」（『詳注』巻一）に次韻した「和諸友登洞巌、用工部竜門寺韻、三首」（『桂隠詩集』巻一）、杜甫「促織」（『詳注』巻七）に次韻した「促織、和工部韻」

（『桂隠詩集』巻三）があるほか、「彭清源用前韻相属、奉和為謝」（『桂隠詩集』巻二）では、「君不見杜少陵流落、瀼西耕稲甸」（君見ずや杜少陵　流落して、瀼西に稲甸を耕すを）と述べ、「贈長沙王自得用之」（『桂隠詩集』巻二）では、「君不是杜少陵、乱離西游復北征」（君　是れ杜少陵ならずや、乱離して西游し復た北征す）と言っているから、杜甫の詩に親炙していたことは間違いない。

柳貫の「五月十一日瘞夭後、独坐斎中、感歎成詩」（全五二句。『待制集』巻二）は以下の通りである。

16冥然如大寐　冥然として大寐するが如し
17児年纔十三　児の年　纔かに十三
……　……
51長歌瘞夭詩　長歌す瘞夭の詩
52哀深得無涙　哀しみ深くして涙無きを得んや

この詩には失った男児が十三歳であったことが示されている。柳貫も「哀伯長侍講・伯生伯庸二待制、同赴北都、却還夜宿聯句、帰以示予、次韻效体、発三賢一笑」（『待制集』巻一）で杜甫「石櫃閣」（『詳注』巻九）に言及して、「杜詩詫蜀険、高有石櫃閣」（杜詩　蜀の険なるを詫（いぶか）る、高きに石櫃閣有り）と言うから杜詩に通じていたことは確かであり、「風疾舟中」詩も踏まえた上で「瘞夭の詩」と言ったと考えられる。この二人の詩では少なくとも「瘞夭」の語は成人を対象とはしていない。

以上、要するに「瘞夭」の語は、杜甫が晩年の体験を述べるために用いたものである。ただしこれが杜甫の実子を埋葬したことを言うのか、孫を埋葬したことを言うのかは決めがたい。強いて言うならば、『詳注』、『心解』が述べるように、晩年に亡くした「児女」、「小女」を指すとするのが妥当ではなかろうか。

注

（1）この詩が大暦五年冬に書かれた絶筆と見なせるかどうかに関しては議論がある。例えば黄生『杜工部詩説』巻一二は「過洞庭湖」を書いてのち、大暦六年の夏に岳陽で没したと言い、近年では王輝斌『『風疾舟中』詩新説―杜甫卒于大暦七年考」（『杜甫研究新探』黄山書社、二〇一一）が、大暦七年（七七二）の春には長沙で「健在」であり、没したのはこれよりやや後のことであるとし、この詩は大暦四年に書かれたする。以下、この詩を「風疾舟中」詩と略称。

（2）第一二句に、「群雲惨歳陰」（群雲　歳陰に惨たり）とあり、第一五句に、「鬱鬱冬炎瘴」（鬱鬱として冬に炎瘴あり）とある。

（3）林継中『杜詩趙次公先後解輯校』己帙巻之六（上海古籍出

版社、一九九四）に、「上句則公必有喪子之禍、但無所考矣。潘岳征西賦曰、……。李善注引岳傷弱子序曰、……。則瘞夭両字分明矣。」（上句は則ち公必ず子を喪うの禍有り、但だ考うる所無きのみ。潘岳の征西の賦に曰う、……と。李善注に岳の弱子を傷む序を引きて曰う、……と。則ち瘞夭の両字は分明なり。）とある。

（4）拙稿「哀辞考」（『中国中世の哀傷文学』研文出版、一九九八所収）参照。

（5）『読杜詩説』巻二〇、「簡呉郎司法」の注に、顧宸が呉郎は杜甫の「姻婭」（妻の姉妹の夫）と見なすのは誤りで、杜甫の「壻」（娘の夫）であると言う。

（6）謝論文も指摘するように、四川省文史研究館『杜甫年譜』（四川人民出版社、一九五八）も『読杜詩説』と同様に、「入衡州」の「猶乳女在旁」の句と「瘞夭」とを関連づけて次のように述べる。

　帯敍其幼女夭亡瘞於路側云、「瘞夭追潘岳、持危覓鄧林。」入衡州詩中曾提到此女尚在餵乳、有「猶乳女在旁」之句、而此言瘞夭、則所夭者必此最幼之女。

（7）杜甫が未陽に宗文を埋葬したと黄鶴が述べたことについて、「仇注」と比較して以下のように言っている。

　其所拠則風疾舟中伏枕書懐詩「瘞夭追潘岳」句、及下句渇死事也。今按入衡州云「猶乳女在傍」、夭者想是此女耳。潘岳征西賦「……」、公詩、用此事、於哺乳之女乃切当。若宗文、是時計年已及冠、得謂為赤子耶？……今按「覓鄧林」、覓瘞夭之所也（鄧林夸父死処、故得借用以言窆所）、「持危」謂忍渇冒死以覓之也。詩題本云「舟中伏枕」、上句又云「行薬病涔涔」、下句云「蹉跎翻学歩」、則是力疾瘞夭、行歩艱難、故云「持危」耳。仇注、「鄧林、謂老行須杖」、亦勝於鶴説百倍。

（8）曹植「金瓠哀辞序」（『芸文類聚』巻三四）は、長女の金瓠の死を、「生十九旬而夭折、乃作此辞。」（生まれて十九旬にして夭折し、乃ち此の辞を作る。）と述べる。

（9）『詳注』巻二三は「風疾舟中」詩の末尾に、『綿竹県志』に宗文は杜甫とともに長江を下らずに蜀地に留まったのであり、その子孫の杜準は綿竹（四川省綿竹県）の県令であったという記載があることを紹介している。

　考『綿竹県志』、宗文十代孫準、世居青城、宋皇祐五年（一〇五三）為綿竹令。此拠嘉靖辛丑（一五四一）氏族譜所載、近年王御史謙言宰綿竹時採入新志。宗文曾留蜀、是亦一證。此事有関少陵世系、今補録於斯。

　考うるに『綿竹県志』に、宗文の十代の孫準、世〻青城に居り、宋の皇祐五年（一〇五三）綿竹の令と為ると。此れ嘉靖辛丑（一五四一）の氏族譜の載する所に拠り、近年王御史謙言　綿竹に宰たりし時新志に採入すと。宗文曾て蜀に留まる、是れ亦一證なり。此の事は少陵の世系に関わること有れば、今斯に補録す。

　類似した記載は、陸游「野飯」（銭仲聯『剣南詩稿校注』（上海古籍出版社、一九八五）巻五、全二〇句）に「可憐城南

杜、零落依澗曲、面餘作詩瘦、趨拝尚不俗（憐れむ可し城南の杜、零落して澗曲に依る、面餘　詩を作りて瘦するも、趨拝　尚俗ならず）という句があり、その「自注」に、「杜氏自譜、以為子美下硤、留一子守浣花旧業、其後避成都乱、徙眉州大埡或徙大蓬云。」（杜氏自譜に、以為（おもえら）く子美　硤を下るに一子を留めて浣花の旧業を守らしむ、其の後成都の乱を避け、眉州大埡に徙り或いは大蓬に徙ると云う。）とあるのと関連しよう。ただし仇兆鰲は、「杜公去成都、正当崔旰之乱、焉得抛留一子。公之子見於詩中者、止宗文・宗武、不聞更有別子。此事猶属可疑。」（杜公の成都を去るは、正に崔旰の乱に当たる、焉（いずく）んぞ一子を抛ち留むるを得んや。公の子の詩中に見ゆる者は、止（た）だ宗文・宗武のみ、更に別子有るを聞かず。此の事猶お疑う可きに属す。）と見なしている。なお王輝斌「樊晃『杜工部小集序』質疑」（『杜甫研究新探』黄山書社、二〇一一）も樊晃『杜工部小集序』の述べるところと合わせて、この説を否定している。

(10)『杜甫親眷交遊行年考』は杜甫の妻楊氏は大暦二年（七六七）前後に夔州で卒したと推定し、「秋日夔府詠懐奉寄鄭監李賓客一百韻」（『詳注』巻一九）以降の詩には「老妻」の語が見えず、代わって「山妻」の語が現れると述べ、これを楊氏が夔州で没したことの一つの根拠としている。ただし実際には、「老妻」の語が見えるのは広徳二年（七六四）の秋、成都で書かれた「遣悶奉呈厳公二十韻」（『詳注』巻一四）に、「老妻憂坐痺、幼女問頭風」（老妻は坐痺を憂え、幼女は頭風を問う）とあるのが最後である。なお、最晩年の「逃難」（『詳注』巻二三）には、「妻孥復随我、回首共悲歎」（妻孥　復た我に随い、首を回らして共に悲歎す）の句があり、この「妻孥」が楊氏と子供を指す可能性は排除できない。

(11)『詳注』に、「鄧林、謂老行須杖。」（鄧林は、老行に杖を須いるを謂う。）とある。

(12) 字は桂翁。『元史』巻一九〇に伝がある。

(13) 字は道伝。『元史』巻一八一に伝がある。

（北海道教育大学）